

---

# 未来トリップ

yuzu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

未来トリップ

### 【Nコード】

N6415Y

### 【作者名】

yuzu

### 【あらすじ】

目を覚ますとそこは10年後の未来。

かっこいい旦那と可愛い娘ができた。

だけど、旦那から離婚届を渡されて・・・。

## エイプリルフールの罫

チリンチリンと耳元で煩く鳴る目覚まし時計を止め、私はまだ開かない目を擦りつつ仕方なく起き上がる。

まだ7時か。眠たいな・・・。

いやいや、高校生になる訳だし。4月の初めは肝心だよね。心機一転した気持ちで清々しい朝を迎えよう！

気分良く1日を過ごす為にもここはフレンチトーストとフルーツを食べようっと。

お母さんはまだ寝てるだろうし。しょうがない。私が朝食を作るか。

トントンと軽快な音を立てながら階段を降りると、キッチンから香ばしい香りのするコーヒーの匂いが漂ってきた。

あれ？お母さん、もう起きてるのかな？

と少し不思議に思いながらもキッチンへと足を運ぶ。

そこには台に乗って朝食の準備をしている可愛らしい女の子と新聞紙を広げてコーヒーを飲んでいるかっこいい男性がいた。

「あ、葵さん。今日は早起きですね。おはようございます」

と手際よく料理をしながら私に向かって丁寧な挨拶をする女の子。

すかさず私も朝の挨拶をする。礼儀には礼儀を尽くさなければ。

実に礼儀正しいことこの上ないのだが、私は女の子と面識がなかった。

しかし、ここは我が家。つまり私の家の住民なのだろう。

おそらく親戚の子どもを今日から預かっているのだと思う。私は聞かされていないが。

まあ、女の子はいいにしても。ここにいる男性はどこのだなたでしよう。

女の子は礼儀正しく挨拶をしてくれたが、男性は新聞紙から目を離そうともしない。

その態度に少々ムカツとした。初対面の時の挨拶は重要でしょうが、だけど、見た目20歳前後の年上の男性に礼儀がなつたらんとは怒れないので、眼鏡をかけた整った男性の顔を睨みつける。

憶測ではないが女の子と顔が似ているところをみると女の子と年の離れた兄妹だろう。何らかの事情で二人を我が家で預かっていると推測する。

「はい、準備できましたよ。ほら、パパは新聞紙を置いて。葵さんも席についていただきますしよ」

「……いただきます」

「……パパ!? 父親? お父さん? ファザー? ダディ?

まさか……いくら童顔にしても20歳くらいの男性の娘が5歳くらいの女の子なんて……一体何歳の時の子供ですか。

「葵さん……? どうしたんですか?」

いや、そういう下世話な話は止めておこう。

並々ならぬ深い事情で我が家にやってきたんだろう。

こんな小さな女の子が丁寧な言葉使いをする必要があるほどの山より谷より深い事情が。

くっ……ここにいる間は私が女の子のお姉ちゃんだ！

「うっん、なんでもないよ。……あれ、私だけフレンチトーストとフルーツだ」

二人の朝食はポテトサラダとスクランブルエッグとトーストと実にシンプルなメニューである。

「？葵さんは毎日フレンチトーストとフルーツじゃなきゃ嫌って」

ん？いつもは普通に食パンだけだったはず。今日はたまたまフレンチトーストとフルーツが食べたかったんだけど……まあいつか。

「おい、これ記入したら出しとけ」

一度も目を合わせなかった男性がこちらを睨むように何か薄い紙を差し出す。

離婚届。

誰と誰が離婚するのだろう。片方だけ走り書きのように雑な文字で記入されている。

その名前は柏原拓真と書かれていた。

もしかしたらと思ったが、自分の両親の名前でないことにホッとした。

どこかで聞いたことのある名前のような……はて？

「パパ、これ何の紙？」

「俺とこいつの離婚届だ。お前は俺が連れていくから安心しろ。新しい部屋はもう決めてある」

こいつってどいつ？いや、男性が女の子に分かりやすく指を差したからわかるよ、うん。

ただ理解したくないというか現実逃避というか。どうして指が私を差しているのかな。

人に指を向けちゃいけませんって習っていないのだろうか。

「りこん・・・？あたしは葵さんと・・・ママと離れなくちゃいけないの？」

「そうだ。こいつとは他人となる。もう家事を押し付けられなくて済むぞ。子どもらしく外で友達と遊んでいいんだ」

「・・・友達と遊びたいけど、ママと離れたくない」

「敬語をつかわなくちゃいけない母親とギスギスした生活を送りたいのか。お前はまだ子どもなんだ。子どもは子どもらしく健やかに過ごすべきだ」

「それでも・・・それでもママと一緒にいたいのに！葵さんだけがあたしのママだもん」

「我が儘言つな！今日の昼には出るからな」

「我が儘じゃないもん！パパが勝手なんだもん！あたしは絶対にここから出ない」

男性が女の子の顔めがけて手を振りかぶった。その時、身体が勝手に動いて二人の間に入った。女の子を守るように庇うと、頬へ容赦のない痛みが揺れる。頭が真っ白になって身体が倒れそうになったが、両足で踏ん張って女の子を庇った。庇わなくちゃいけない。私の子どもだけは絶対に。女の子に当たっていたら軽い子どもの身体なんてすぐに吹き飛ばされていたことだろう。

「なに本気になって子どもを叩こうとしているんですか」  
ジンジンと頬が痛む。また叩かれるかもしれない。それでもこの馬鹿な男性に怒鳴りつけたかった。なんで可愛い我が子を叩こうとするんだ馬鹿が。

「—————っ」  
私が間に入ってきて戸惑ったのか、初めて迷った顔を見せた。その顔を今にも殺さんばかりの殺意を込めて睨む。

「うわああああああああああん」  
女の子が盛大に泣き始めた。これはこの大馬鹿な男性が全面的に悪い。

男性に冷ややかな軽蔑の眼差しを向ける。  
「・・・ごめん。俺が悪かった」

男性は不器用に女の子の頭をポンポンと撫でる。  
おい、私には謝罪無しか！素で無視かよ、こんちくしょー！

「お前はこいつといたらいい。俺が出て行けば丸く収まる話だった。でもな、俺はお前と一緒にいたかったんだ」

男性が優しい顔で柔らかく笑った。少しだけ切なそうに。その顔を見たことがある既視感。初めて会う男性なのに。そう、昨日初めて会った男の子もこんな顔をしていた。

――3月31日。中学生も卒業して長い春休み。

つい先日誕生日を迎えたばかりだが、春休み期間中のせいで親と親友にしか誕生日を祝ってもらえないことが葵には不満だった。

せつかく桜も咲いて綺麗だっていうのに公園で花見の席取りを一人なんてついてない。

一人で甘酒を飲んで桜を眺めるというのも風流でいいけどさ。

一人よりは二人のほうがいいに決まってる。

だいたいなんで中学も卒業したのに中学校の制服で集まるんだっつーの。ただの痛い人だよ。

知り合いに見つかったらどう言い訳すればいいのさ。なにが今日で最後だよ。卒業式で制服とはさよならしたじゃん。

もーなんでもいいから早く誰か来てよ。私一人制服なんて恥ずかしいよ！

そんなとき、制服を着ている一人の男の子がやってきた。

おろしたてで新品のぶかぶかな制服を着た男の子。私が卒業した中学校の制服。

新鮮な気持ちになった。私も入学当初はあんな感じで初々しく恥ずかしいような誇らしいような気持ちで制服に袖を通した。

今の私はどうだろう。初々しさもなく誇らしい気持ちもない。ただ

ただ制服を着ていることが恥ずかしかった。

でも、もう今後この制服は着られない。

3年間共に過ごした思い出のいっぱい詰まった制服とさよならだ。

そう思うと胸が詰まった。ぎゅっと制服を握り締めボロボロと涙を流した。卒業式だって呆気なく終わって涙が流れなかったっていうのに。

「……っひく……うう」

「大丈夫ですか？あの……これ、どうぞ」

そう言っつて折り畳まれたハンカチを差し出してきたのはあの制服姿の男の子。

驚いてハンカチと男の子の顔を交互に何度も見る。男の子は徐々に顔を赤くして恥ずかしがっていた。ハンカチをポケットにしまおうとした手を両手で止めた。

「ありがとう。ごめんね、変なところを見せちゃって」

「い、いえ、差し出がましいとは思ったんですけど、あなたはそんな風に笑った方が可愛いです」

年下の男の子にこんなサラッと可愛いと言われたのは初めてだった。男の子に借りたハンカチで涙を拭き取っていたが、一瞬で涙が引いた。思わず顔が赤くなる。

「かわ、可愛いなんて、そんな……。ハンカチありがとう。洗って返すね。同じ制服だから同じ中学校の新生入生ってことは分かるん

「ただ、名前聞いてもいいかな？」

「僕は柏原拓真って言います。よろしくお願いします、先輩。先輩の名前を聞いてもいいですか？」

「私は綾瀬葵。でも、もう先輩じゃないんだ。卒業しちゃってね。来週からは成徳高校の新生。拓真君と同じピカピカの一年生。これから楽しみだね」

「はい。楽しみです」

拓真君は桜が散るのを惜しむような切ない微笑みを私にくれた。私は桜が羨ましくなった。

こんなに似ているのに同姓同名の赤の他人なんてあり得るだろうか。拓真君が10歳年取ったらこんな男前になるのだろう。

拓真君に借りたハンカチは昨日洗濯したあとアイロン掛けて机の引き出しにしまったはず、早く返さないよ。

「あの・・・あなたは私が昨日ハンカチ借りた拓真君？なんか随分年を取ったみたいだけど」

そう言うと男性はすごく驚いていた。口を大きく開いて呆然とした顔を見せた。

論より証拠だと思い、私の部屋の机の引き出しから拓真君のハンカチを取り出し、まだ涙を流している女の子の為にも私のハンカチを持って行った。

「はい、昨日はハンカチありがとう」

黙って考え込むように男性はハンカチを受け取る。

私は女の子の目線になるよう座ってハンカチで優しく涙を拭き取る。女の子は目を真っ赤にしてうさぎさんのように可愛かった。

「あ、ありがとう、葵さん」

「ううん、私はあなたのお母さん・・・ママだよね？ママって呼んでほしいな」

まだよくわからない。私が間違っているのか、世界が間違っているのか。

どうやら私は一人未来に来たみたいだ。

今日は4月1日。エイプリルフールのドッキリなら早く明日になって本当のこと教えてほしい。

## エイプリルフールの罠2

女の子が泣き止むまで私達は食卓に座って無言で待っていた。ちょうどよく考えたいことがあったから無言も苦痛ではない。

女の子と男性の会話を回想してみると、どうやら私は女の子の母親で男性の嫁……。

「……嫁！？妻？奥さま？ステディ？ハニー？」

ステディは恋人だっけ。えー、私結婚しちゃってんのか。

だけど、離婚届を渡されたな、はは。笑えねえ。

昨日、初めて会った同じ中学校の新生入生だった拓真君。

それが今日男性は10年後の拓真君の姿と判明。

1日にして皆が10歳年を取ったのか。それとも私一人10年後の未来にきたのか。

それにしても記憶にない今までの私はずいぶんひどい母親だったらしい。

5歳くらいの娘に家事と私に敬語を強要していたなんて……虐待もいいところだ。

そんな母親を慕っている女の子。見てて切なくなるくらい良い子だ。両親が勝手に離婚しようとして離れ離れになるのを一生懸命引き止めた。

記憶がない以上、ちゃんとした母親になれるかわからないけど、我が子を精一杯育てていこうと誓う。

ようやく女の子が泣き止んだのを見て私は重い口を開いた。

「私はつい昨日まで15歳でした。その15歳もつい最近誕生日を迎えたばかりです。正直、私は結婚したことも子どもを産んだことも嘘なんじゃないかと思っています。ですが、女の子は我が子だと

わかります」

「記憶喪失・・・か」

「・・・葵さ、ママはあたしのこと覚えてないの？パパのことはわかったのに・・・」

「ーう。私、ずっと娘ができたなら葵から名前を取って愛にしようと決めていたんだ。何回記憶がなくなっても愛の名前だけは絶対に忘れないよ」

「・・・うん。ぐすっ」

また涙を流す愛。だけど、泣いているのに嬉しそうな顔を見て心からホツとした。

もう愛を悲しませたくない。

「記憶喪失となった原因がわからないな。昨日もいつもと同じだったと思うが。一度病院に行く必要があるか」

「その前に教えてほしいんですが、今、私は何歳ですか？」

「ああ、25歳になったばかりだ。ちょうど10年間の記憶がないみたいだな。俺は22だけどあと3日後に23、愛は4歳だ」

「やっぱり・・・10年後の未来ってことですね。20の時に産んだってことはもしかして父親は違う人ですか」

「はっ、残念なことに俺が18歳の時お前に騙されてきた子だ」

嫌味つたらしく私にだけに聞こえるよう囁き、厭な笑みを浮かべる。目は笑っていない。それでもさっきまでの存在を無視された状態ではなくなって良かった。ただ心は痛い。昨日の心優しかった拓真君はいないのだと認めたくなかった。

### エイプリルフールの罫3

「心因性健忘症ですね。心因性とは人間関係のストレスが原因で起こります。ある一定期間の記憶喪失のことを部分健忘と言います。あなたは今その状態なのでしょう。治療には麻酔分析療法と催眠療法がありますが、今日治療されますか？」

「いえ、いいです。ありがとうございます」

私の了解もなしに勝手に返事をする大人版拓真君。

私と話すときは違う、八方美人な笑顔。外面のいいですこと。

これ私に言ってくれてんだよね？私が返事した方がいいんじゃないのかな。まあ、いつか。

そんなことより病院は保険証が必要だから本人確認のために保険証を見たわけですよ。

本来なら名前は綾瀬葵、生年月日は昭和 年3月28日って書かれてあるはずなのに・・・。

病院ってあれだよな。ナースさんがフルネームで呼ぶから私が柏原葵だっということも愛に言われなきゃわかんなかったよ。

そう、保険証は正確だった。私の名前が柏原葵に変更されていること以外は。

結婚したら苗字が変わったことすっかり忘れてた。

そつえばどうして拓真君は私のこと嫌いなのに結婚したのかな。聞いたら教えてくれるといいな。

病院から帰宅して保険証と診察券を財布に仕舞うと、大人の女性ら

しくセンスのいいブランド物の財布の中から私の取った覚えのない免許証が出てきて吃驚した。

何が一番驚いたって誰でも犯罪者に写るって評判の顔写真に写る私。18歳らしき私の顔は悪女だった。

悪女、髪が茶髪でクルクルなうえに化粧バツチリの厚化粧女。

素朴で没個性な私の顔が写るはずなのに別の誰かのように思えた。誰だこの女。

18歳で悪女なら25歳の私はどんな顔に。

恐くなって急いで洗面台の鏡を覗き込むと、そこには……。

薄い眉、キツイ目尻、シャープな顎、髪はストレートの黒髪。

黒目が大きくて猫みたいなドロップ型な目は元々そんな目だったからいいとしても、この顔は化粧したら小綺麗な大人の女になるんだろうけど生意気で性格悪そう……。

髪が黒髪なのはいいね。やっぱり社会人たるもの清潔感のある黒髪が一番。

問題は25歳になったらスツピンのまま外出ちゃ駄目ってことね。眉が薄過ぎて心許ないよ。前髪下ろして隠しておこうっと。

あら、やだ。前髪長すぎ。ここは思い切って剃刀で……。

あ、やば。切り過ぎた。ま、まあ、パツンていいと思うな、うん。……美容院行くか。財布の中に行きつけっぱい美容師の名刺を見つけたことだし。

ちよっと前髪を弄りながらリビングに行くと、二人は驚いた顔を見せた。

「えっ、ママ。どうしたの、その前髪？」

「う、うん。ちょっとしたイメチェンかな」

「来週から仕事だぞ。そんな変な前髪でいいのか」

「明日、美容院に行きます！」

「ーグサッ」

わ、私だって変だってわかってるもん！！

「ママ、可愛いよ！いつも皆から愛ちゃんママは綺麗でいいねー  
って言ってくれたけど、あたしは今のママがいいな」

な、なんて可愛いんでしょう！うちの子が宇宙一可愛い！

「ね、パパも今のママ可愛いよね？」

「お前の方が可愛いよ」

優しい顔で愛の頭を優しく撫でる拓真君。

自分の娘を口説いてやがるこのヤロー。ちょっと、はこっちを見て  
くれてもいいと思うんだけどな。

はっ、もしかしてロリコン。

「ロリコンじゃねえから」

ですよー。何故心読まれたし。意外とこっち見てくれてるのかも。  
なーんだ、素直じゃないだけか。そう思うとこの小憎らしい顔も  
愛おしく。

「キモいからこっち見んな」

死ね！いっぺん死んでこい！

惨たらしく死ね。ミンチになって死ね、ていうか殺す。

「ね、パパ。それをツ、ツンドラ？ツンデレ？って言うんでしょ」

誰だ！可愛い我が子にオタク用語なんて教えた奴は！

ツンデレってなんだっけ。愛にはデレ、私にはツンの状態のことを言うんでしたっけ。

「ツンデレじゃない。こいつが嫌いなだけだ」

「なら！一度ちゃんと聞きたいと思ってましたけど、どうしてそこまで私を嫌ってるのに私と結婚したんですか？愛が嫌がること」

「それは・・・愛がいたから。愛がいなきゃ誰が結婚なんかするか」

「なら、どうして今日離婚しようとしたんですか？愛が嫌がることわかってたでしょ」

「それが愛のためだと思ったからだ。虐待する母親から無理やりでも引き離れた方がいい」

「私は虐待しません！認めて下さい、もう今までの私じゃありません。愛のためにちゃんとします。お願いですから愛のためにも家族を離れ離れにしないで下さい」

「・・・わかった。記憶が戻るまでは離婚の話は保留にして

おく。それでいいな？」

「はい、もちろんです」

私と拓真君と愛の共同生活が始まった。

色んなことがあったからきつと二人ともエイプリルフルだって気づいてないんだろうな。

私は気づいていても嘘つきの苦手だから言わなかったけど。

## 旦那様の誕生日

10年後の世界に来てから3日経った今、4月4日。

4、つまり死を意味する日だ。不吉な予感がする。

今日、何かあったような・・・まあ記憶にないってことはたいして重要でもないか。

愛が私の服の裾をクイクイっと引っ張って内緒話するように私の耳に手を添える。

「あのね、今日、パパに内緒でサプライズバースデーパーティーしよう！これからケーキとプレゼント買いに行こつ、ね？」

もちろん可愛い我が子に可愛くお願いされたらたとえ地獄でもお供しますとも！

で、誰の誕生日だって？私は誕生日過ぎたばかりだし、愛は2月14日に誕生日でしょ。

「ごめん、愛。誰の誕生日？」

「もう、パパの誕生日でしょ。確か23歳になるって言ってたよ」

愛はわかりやすく紅葉みたいに可愛い両手で左に2本、右に3本指を立てた。

うん、32本ロウソク貰うか。嫌がらせです。

「あたしはもうパパの誕生日プレゼント買ったけど、ママはまだでしょ？」

「ああ、そつだね。しょがないな、盆栽でも買うか」

「パパは育てないと思うよ?」

嫌がらせパート2です。絶対あげても嬉しくないプレゼントをあげてやる。ああ、子供っばいさ。精神的に15歳だからな!

「パパはね、結構可愛いものが好きだよ。ヒントはあたしも大好きなもの」

「よし、わかった!とりあえずデパート行こつか」

来ましたinnデパート。

デパ地下には色鮮やかで美味しそうなケーキがたくさんある。

さて、どんなケーキにしようかな。

やっぱりチョコレートケーキでシックにいくのもいいけど、ショートケーキの生クリームと苺のコラボもいいし、チーズケーキの濃厚な味わいも捨てがたい。

「うーん、愛は何のケーキがいい?」

「あたしはね、フルーツたっぷりのケーキがいいな!」

フルーツケーキとシャンパン2本と子供用のシャンパン1本を購入したことだし、お次はキッズコーナーでせいぜい可愛いプレゼントでも買いましょうか。

「・・・ママ、違うよ。パパはベビーグッズ特に好きじゃないよ。」

えっと、世界的に大人気なキャラクターだよ！ヒント2は東京ネズミランドにいるよ」

「ああ！はいはい、あれね。あのネズミね。でも、黒いネズミってのは黒死病をもたらすから。よくない象徴だから」

「・・・そんなことないもん」

「あ、うん、そうだよね！黒いネズミ可愛いよね！うん、黒いとこるとか」

「黒いネズミじゃない方が可愛いの！あたしは白い女の子のネズミの方が好きだもん。パパは黒い男の子のネズミの方が好きだけど」

「鼠色の双子ネズミがママ好きだなあ」

そつだ！家族で黒白鼠色ネズミたちのぬいぐるみでも買おうかな。また別にプレゼント買うか。そつだ、あれがいい。

パンパンパーン

拓真君が扉を開けた瞬間、私と愛はクラッカーを一齐に鳴らす。

タイミングばっちり！拓真君は煩そうに顔をしかめたが、それでも机に置かれている豪華な食べ物の数々に今日が何の日か思い出したようだ。

「そつか、今日は俺の誕生日か」

「パパ！お誕生日おめでとうー！はい、これどうぞ」

「お、黒いネズミのキーホルダーか！ありがとう。鍵につけておきな」

えへへと照れたように笑う愛を拓真君は抱っこをした。  
り、理想的な家族愛だ。あー、やっぱり普通のプレゼントにしておくべきだったか。

「ママとね、ケーキとプレゼント買ったんだよ！フルーツケーキはあたしが選んだの」

「そうか。それじゃあ早く食べよう」

私には普通に無視つと。いいさ、いいさ。こんなものゴミ箱に捨ててやる。

「ママもパパにプレゼント渡したいって！一緒に選んだんだよ」

「は？まさか……………」

無言で手を差し出す。顔は無表情で。

私もしやに緊張して無表情でプレゼントを手渡す。

長方形のボックスのリボン結びをゆっくりと解いて…………。

バーーーーーン

「拓真君、23歳の誕生日おめでとう！」

「うわっ！…………いた」

昔流行った箱を開けるとバネのように飛び出してくるファンキーなぬいぐるみ。それが見事拓真君の顎にアッパーを繰り出した。

大成功！くふふと抑え切れない笑みが口から洩れる。キツと鋭い目でこちらを睨んでくるが、仄かに涙目だったことに気分を良くして思う存分腹を抱えて笑い転げる。

愛は大きな音に驚いて私の笑い声にまた驚いて、徐々に私の笑いに釣られて愛も可愛く笑う。

拓真君は呆れたように見ていたけど、口元が自然と笑っていたのを私は見逃さなかった。

その日は笑顔の絶えない一日となった。

黒白鼠色のネズミたちの家族を大きいソファに置いた。

拓真君は黒いネズミを愛は白いネズミを私は鼠色の双子ネズミを抱いて一緒にDVDを観たのだった。

## 15歳の先生

月曜日、今日から仕事が始まる。

拓真君曰わく、私は成徳高校の教師で今日は始業式なんだとか。高校はここに通っていたらしいが、入学した以降の記憶がないのでなんとも言えない。

拓真君は先週の金曜日に入學式があったから私と違って挨拶が必要だったらしい。

なんでも拓真君も成徳高校の新米教師だとか。そんな偶然であるのね。

愛も今日から幼稚園に通うので私はいつもとより早起きして愛のお弁当を作る。見事に茶色一色だ。色鮮やかなキヤラ弁作れるママさんが羨ましい。

きつと愛が作った方が美味しいのだろうが、私が料理作る時いつも手伝ってくれる上に本当に嬉しそうな顔をしてママの作る料理が一番美味しいと言ってくれるからすっかり料理好きになってしまった。煮物料理ばかりだが。

よし完成、と。愛と自分の分と、ついでに拓真君の分も、2コ作るのも3コ作るのも一緒だしね。うん、他意はない。

「おや、綾瀬先生ではないですか。お久しぶりですね。終業式以来姿を見せないので何かあったのではと心配していたんですけど、ご自宅の方が忙しかったのでしょうか。ああ、そういえば綾瀬先生のところは小さいお子様がいらっしやっただけでしたっけ。それはそれは大変ですねえ」

げっ、誰だ！このいかにも生徒から嫌われていそうな回りくどく嫌味を言う人は。私の予想だとドラマとかでよく出てくる嫌われ者は十中八九教頭先生だ！親切で優しい人は校長で、裏ボスは理事長だつたり逆もあつたりする。

しかし、このハゲ具合から察するに校長に媚びて生徒から嫌われているせいでストレスハゲっばい、つまり上にも下にも苦労させられる教頭先生だと推測する。

「あら、堀先生いかがなされました？こんな門のど真ん中で会話されますと生徒の通行の妨げになりますよ」

このお方も誰なのだろう。なんか高貴な貴婦人って感じがする。

人の上に立ち、迷える子どもたちを導くような、そんな女神のようなおばさま。この尊いお方ならきっと校長とか理事長とかに違いない。

「き、教頭先生！いえ、別に。私はこれから教室に行かなくてはいけませんので失礼します」

「ーーーーブツ!!!」

わたくし、さんざん教頭先生の悪口を言いましたが、あれ無しです。前後撤回します。ドラマの見過ぎでした。ほんと私自身迷える子どもですいません。

「綾瀬先生、ほら早く行かないとチャイムが鳴りますよ。ふふ、一緒に行きましょう」

「はいー!」

「そうそう、柏原先生に聞きましたが、綾瀬先生は記憶喪失らしいですね。その、今年も引き続き3年2組の担任で大丈夫でしょうか？何かあった時のために柏原先生に補助についてもらうよう副担任をお任せしましたが・・・」

「大丈夫です。ご心配をお掛けして申し訳ございません。どうか生徒には御内密にお願いします」

「ええ、勿論です」

拓真君の誕生日会をした次の日から徐々に私と会話してくれるようになった時に仕事について詳しいことを聞いていた。

私立高校らしく1年生の担任をすると卒業までずっと担任をしなければならぬとか。

拓真君が大学3回生の6月に2週間母校の成徳高校で教育実習があった時、1年2組の担任が私だったらしい。偶然私のところで2週間の間実習を受けていたとか。

私が国語の古文を教えて、拓真君が国語の現代文と漢文を教えるから都合が良かったのだと思う。

拓真君は持ち前の八方美人さですぐに生徒の皆から好かれていたらしい。

拓真君は予備校の先生を大学の間ずっとしていたみたいなので教える方が上手い。記憶のない私のために指導方法を今日までみっちりしごいてもらった。ふっ、土下座の1つ2つ軽いものさ。

古文は慣れると意外と簡単だった。元々語学系に強い私にとって古文って昔の日本語だし、昔の時代背景さえ掴めればいける。

ただ問題なのは3年生に教えなければならぬってこと。高校受験したことがある身としては受験生は皆必死で、子どもたち

以上に保護者と先生たちが悪い意味で受験生の志気を高めるため受験生は頑張っても頑張っても終わりが見えず周りが敵だらけになる。今回3年生の受験は担任に全責任がかかっている。どれだけの生徒が有名大学に入られるか、それはその高校のブランドに繋がる。

そのため3年間一緒に先生にすることによって先生と生徒に深い絆を築く。生徒が何か悩んでいるならすぐに担任が気づけるように。しかし、2年間一緒に過ごしてきた私が急に記憶をなくしてしまつたせいで生徒の名前と顔を忘れて一から生徒の名前を覚えるところから始めなくちゃならなかった。指導も初めての新米教師未満のレベルである。

これからは拓真君に影の担任として頑張ってもらい私は引き立て役になる所存であります。

「あ、そうそう、先生として一番言つてはいけない一言があります。質問されてわからないって言つては駄目ですよ。生徒にとつて先生とはなんでも知っていると置いています。国語の先生に数学を普通に聞いてきます。その場合は数学の先生に聞くよう頼んだらいいのですが、なるべく一つの教科にこだわらず他の教科についてもわかるようになっておいて下さい。ですが、先生も人間ですのでわからないことも多々あると思いますが、くれぐれもわからないとは言いませんようにお願いしますね」

「・・・はい、わかりました」

「それと、わからないって伝えることはもちろん駄目なのですが、知ったかぶりをして生徒に間違つた情報を与えることもよくありません。そんな時は素直に訂正しといて下さいね」

「・・・善処します」

これはフラグというものでしょうか。  
何故だか嫌な予感がします。いつになくこんな勘が当たる気がします。  
す。全く嬉しくありません。

## 15歳の先生2

最後のクラス分けが大きな掲示板に張り出される。

ほとんど持ち上がりのためクラス分けの変更はないに等しいが、嫌いモンスターペアレンツがいる昨今そういう子は問題児をよく見てくれる1組に移動される。生活指導の先生でもあるため保護者受けはいいが、なんといってもあの堀先生である。

口うるさくネチネチと粘つくく嫌みを言ってくる先生が担任では生徒は1年間も耐えられないだろう。哀れな。

職員室で今年入ってきた新米教師たちの挨拶も終わり、拓真君と一緒に3年2組へと訪れる。

3年2組のドアを前にして深呼吸をする。

「名前と顔はちゃんと予習してきたし、古文の教科書にはわかりやすく単語の説明とか書かれてあるから大丈夫、大丈夫。それに授業は明日からだもんね！今日は簡単な挨拶だけ、イける！」

と、自分に暗示をかける私。

大勢の人の前で喋らないといけないことが苦痛でしようがない。

何か失敗をしないだろうか、この格好は変じゃないだろうかとそわそわする。

眉の上で綺麗に切られた前髪をしきりに気にして拓真君に声をかける。

「ね、ね？私の前髪変じゃない？なにかおかしいところない？」

「はあ。もう今更だろ。早く入れよ」

なんてデリカシーのない奴だ！

乙女心のわからない奴なんか女の子にモテないぞ。

軽くイラツとして、怒りに身を任せて豪快にドアを開けた。

「……」が、ドアはあまりの勢いに反動で跳ね返ってくる。突然バンツと大きな音がしてドアが開いたかと思えば、すぐにバンツとドアが閉められて生徒たちはザワザワとざわめつかせていた。

「やっ……て……しまっ……た。」

なんてこった……今時小学生だってこんなことしないのに。

チラツと拓真君の方を見ると、ほんとこいつはどうしようもない奴だなという目で見てきた。人を見下してる目だ。

またイラツとした。拓真君のこういう人を馬鹿にするところは直した方がいいよ。

「皆、今日からまた1年よろしくね。皆もうわかってると思うけど、3年2組の担任の綾瀬葵です。さっきはごめんなさい、こちらにいるたくま……柏原先生が皆と初の顔合わせではしゃいじゃって……許してあげてね？」

何もなかったように笑顔で入っていき、スラスラと嘘をついた。エイプリルフールするときですら嘘つけないのに。やれば意外とできるものだ。

すごい勢いで拓真君がこっちを見てきたが、無視だ。無視。

怒った私は恐いのだ！怒りで頭が湧いていて気づかなかつたが、人前で緊張せずにスラスラ話せるようになっていた。緊張を緩和させるのは怒りのパワーなのかもしれない。

「じゃ、柏原先生から挨拶してもらおうかな。そのあとは皆が柏原

先生に挨拶してあげてね。柏原先生に質問は1人1つまで！」

「お久しぶりですね、皆さん。この度は3年2組の副担任として帰ってきました、柏原拓真です。1年間という短い間ですが、よろしくお願いします」

一見冷たく見える整った顔をした拓真君が精一杯の愛想笑いをして生徒に対して敬語を使う慇懃無礼な態度で優しい先生を演じていた。

「はいはいはい！前は教えてくれなかったけど、拓真先生は付き合っている人いるんですかー？」

率先して拓真君に質問をする可愛いギャル系の女の子。

えっと、確か水嶋有里さんだ。女子グループのリーダーらしい。私の要注意リストの一人だ。堀先生もブラックリストに入ってる。

拓真君に好意があるのか積極的な態度だ。モテそうな子だけあって自分に自信があるようだ。若さゆえの瑞々しさというか化粧しなくてもすっぴんでいられる肌がいいな。でも、高校生くらいが一番化粧に興味があるお年頃なんだよね。この水嶋さんも薄化粧に見せかけてばっちりメイクしてある。いいね、25歳ともなるとすっぴんでいられない上に化粧すればするほどケバくなる顔だから羨ましいよ、ちっ。

その質問が出てくることを私は想像していたが、やっぱり少々動揺してしまう。

鉄の仮面をつけて無表情を保つことに成功した。拓真君がなんて答えるかによって今夜の晩御飯に影響が出てくるぞ。

「残念ながら、付き合っている人はいません。・・・付き合っている人は、ね」

と、こちらにチラツと思わせぶりに流し目をしてくる拓真君。うわっ・・・何こいつ・・・きめえ。付き合っている人がいないって聞いて女子たちの目が爛々と輝く。若いながらに立派な雌豹の目をしている。

ふっ、だが甘いぞ女子たち！この拓真って人はそんな容易く狩られないぞ。多分な。

一通り質問と生徒たちの挨拶も終わり、クラス委員を去年から引き続いている相羽君に任せて、他の委員を決めてもらう。

相羽君は先生や生徒たちから絶大な人気を博している。イケメンで頭がいいから将来有名大学に入ることが期待されている。

こんな子に限って普段抑圧されている欲求が溜まって一気に弾けたりするんだ。裏で不良と繋がっていたりね。ドラマ知識ほんとうにかしないと。

担任と副担任の雑用しかしない雑用係は何故か争奪戦を繰り出すほど人気があったが、水嶋さんに決まった。

「あれ、そういえば小内山君がいませんけど、別のクラスに行っただけでしょうか？」

ふと、思い出したかのように相羽君が口を開く。

2年間も同じクラスだったクラスメートがいなくなるとすぐにバレる。でも、記憶がない私は当然小内山君が誰か知らない。

ここで別のクラスに行くことを左遷という。

親がモンスターペアレンツか生活指導で目を付けられて問題児になると、1組の堀先生軍団の一員になる。

「えっと、小内山君って・・・？」

「えー、いやだー！先生とあんなに仲良かったのに忘れちゃったの  
お？信じられなあい」

女の子らしい喋り方で笑ってくる水嶋さん。周りの女子もクスクス  
と笑っている。

・・・何がおかしいのかわからないが、箸が転んでも笑う年頃だ。  
気にするだけ損だ。

とても不快で眉間にしわが寄る。胃がキュッと締めつけられる感覚  
に気持ち悪くなって吐き気がする。

「小内山君は4月に転校したそうです。皆に挨拶できなくてごめん  
なさいと言付けを預かっています」

私の代わりにフォローしてくれる拓真君。

本来なら私の役目なのに、私に記憶がないばかりに。

「え、柏原先生は教育実習のとき小内山君とそんな交流ありました  
っけ？彼、おとなしかったからなんか意外です」

「・・・彼はね、昔の俺に似ているんですよ。転校する前日に綾瀬  
先生へ挨拶に来たみたいですけど、その時綾瀬先生はいなくて俺  
が伝言を預かっていましたんです」

拓真君は昔を思い出すかのように遠い目をする。私が知っている拓  
真君は泣いている子を見るとハンカチを貸してくれる心の優しい男  
の子だった。小内山君もそんな優しい男の子なのだろう。

「えー拓真先生ってすっごくカッコいいじゃないですか！全然似て  
ないですよー」

「そんなことないですよ。昔好きだった女性からはダサいって振られましたから」

「ーーーードキッ」

昔を思い出して苦笑する姿に意味もなく泣きたくなつた。

拓真君の好きな人つてどんな人だったのかな。自分に自信のある女性なのだろう。プライドが高くて彼氏にも強要するような女性。

私は違うな・・・自分に自信ないしプライドなんて土下座する時に捨てたしそもそも告白されたことないし。

「それなら、その人絶対後悔してますよー。だって今の拓真先生芸能人に負けないくらいイケメンですもん！」

周りの女子も真剣な顔で頷く。その様子を黙って見ていた男子たちは引いている。私も若干引いている。

思った以上にモテモテでこの先ずっと女子たちに追いかけられるのではないか。せっかく旧姓で名前呼んでもらっているのにこのままだとすぐ結婚しているってバレちゃいそう。まあ、いつか。バレるときはバレる。バレたらまた考えればいいじゃないか。

「あれ？柏原先生、彼女いないんですよね。でも、その左手の薬指の指輪って・・・もしかして結婚しているんですか？」

えっ・・・そんな今まで一度もつけていなかったのに・・・どうして？

驚いて拓真君の左手の薬指を見ると確かに結婚指輪をつけていた。私は結婚指輪をなくしてはいけなかったのでチェーンで首にかけていた。お揃いのシンプルな結婚指輪。

「ええ、実は結婚してるんですよ。今、4歳のすごく可愛い娘もい

るんです。娘から誕生日プレゼントにもらった黒いネズミのキーホルダーを家の鍵にずつつけていますよ」

デロデロに甘い顔をして黒いネズミのキーホルダーを見せて娘自慢を始める親バカ。

妻子持ちな上に親バカな男と知って、暗い表情をする女子。しかし、果敢にも立ち向かおうとする勇者の姿が。まだ諦めていない、死んでいない目だ。

「拓真先生、さつき付き合っている人は、いないと言いましたよね。それって実は指輪はフェイクなんじゃないですか。例えば、奥さんと離婚したけど、女除けのために指輪してるとか？」

・・・そういうことか。学校行き始めてから指輪をするなんておかしいと思ったんだよ。うん、全然期待してなかったさ。

それにしても相羽君といい水嶋さんといい勘が鋭いな。人の凶星を的確に突いてくる。油断できないな。

「ああ、妻は付き合っただけじゃないから。愛していますが、恋人ではないですよ、大事な家族ですからね」

く、口八丁なんでも言えるよね。静まれ、鼓動。ドキドキドキ。

愛しているなんて嘘ばかり！私のこと嫌いなくせに。だいたいその嘘臭い笑顔も止めるっての。バツカじゃないの！勘違いするな、バカバカ。落ち着け、落ち着け。

ここまで完膚なきまでに突き放されれば水嶋さんだって・・・。水嶋さんの方に目を向けると、彼女は挑戦的に笑っていた。

修羅場の幕開けだ。何か大事件が起こりそうな予感に私の第七感が告げていた。  
これが恋愛フラグであると。

## 15歳の先生2（後書き）

訂正）モンスターパーレンス モンスターパーレンツ

と御指摘があったので直しました。ありがとうございます！

15歳なのに何故教師やるのかと真つ当なご意見がありました。

眼鏡をかけたら25歳の主人公に戻るとか昼だけ25歳の主人公戻るとか色々考えたんですけど、どうしても話の進行上15歳の主人公に教師をさせたくてこうなりました。

せめて（受験に関係のない、いや、美大生希望には関係あるんですけど美術の授業は国公立大学狙いの進学コースは高校1年生だけしか授業しないので。音楽か美術か書道か選択授業）美術の先生とかにすればよかったのかもしれない。申し訳ありませんでした。

### 15歳の先生3

午前中に始業式も終わり、生徒たちは友達と一緒にわいわいと騒ぎながら帰宅をする。

すっかり寂しくなった教室を後にして私は職員室でクラブ活動をしている生徒たちの声を聞きながらお弁当を食べる。

午後から会議をして16時に一旦解散をするが、17時から新米教師の歓迎会をするらしい。

私は途中から愛を迎えにいかなくてはいけないが、拓真君は最後まで残る。今日の主役が途中で抜けだすことができるわけがない。

あと、もうちょっと一踏ん張りしますか。絶対、会議とか心地よい眠気が来るはずだから内緒で薄荷飴を口に入れておこうかな。

両手を伸ばして背筋を伸ばす。

その時、手がなにかにぶつかった。後ろを振り返って確かめると。

「いて！・・・お、綾瀬、今日の弁当美味そうだな。ちょっとくれよ」

そこにいたのは中学時代2学年上の五十嵐颯斗先輩だった。

あまり関わりがなかったが、五十嵐先輩は人気者だったため風の噂で成徳高校にいったと聞いていた。その後を追って私も成徳高校を目指した。

五十嵐先輩は皆から望まれて生徒会長になった。いつだって皆の中心にいて太陽のように明るいムードメーカーな人だった。私もそんな先輩に憧れて中学時代は外からそっと見ていた。

青春時代の象徴である憧れの人を目の前にして、私は動揺した。

あの時だつて外から見ているだけだつた。それが今は手を伸ばした  
らすぐ触れる位置にいる。憧れの人が私に声をかけてくれて私の目  
を見て私を認識してくれている！

10年の年月が経つた今もなお、太陽のように明るい笑顔をしてい  
た。

拓真君も私もすっかり変わってしまった中で五十嵐先輩だけは昔の  
ままだつた。心の底から安心した。

「お、おいおい・・・ごめんって！オカズ取ろうとして悪かつたよ。  
お詫びにランチ奢つてやるからもう泣くなつて！」

泣いてる、私が？

そう言われて手を頬にやると、頬を伝う温かい存在に初めて気がつ  
いた。

「ちが、違うんです。五十嵐先輩が変わっていなくて安心して涙が  
出たんです・・・」

「？そうか？俺はこの1週間でだいぶ変わったと思うぞ！見る、こ  
のプリプリな肌！毎日、コーゲン食べているおかげだな」

「ぶ、あははははは」

全て変わってしまったと思つた。いきなり娘と旦那ができてあま  
り深く考えずに日々を過ごしてきた。自分のことなのにどこか他人  
事のように捉えていた。目を覚ましたらまた15歳に戻つてお母さ  
んがいてお父さんがいて友達がいる現実に戻れるのだと。今いる世  
界は夢の中なのだと思つたとそう思っていた。

だけど、何回も寝たり起きたりを繰り返しているうちにやっと疑問  
に思つた。私は今現実にいるのではないかと。日々を流されるまま

15年間過ごしてきた私は何も変わらないのだと思っていた。自分も周りも何一つ変わらないまま過ごすのだと。現実には記憶にない10年の間でだいぶ変わっていた。学校帰りに行きつけだった駄菓子屋がコンビニに、幼少のころよく遊んでいた田んぼが綺麗に整備された公園になっていた。

私も若さ溢れるハリのある肌ではなくなっていた。15歳の肌は二キビもあったし、美容対策もしていなかったからよく日に焼けていた。だけど、若さがあった。

ある日、洗面台の鏡に写る自分の姿が嫌になって鏡を割ってしまった。愛は泣きながら私に抱きつき拓真君は黙々と割れた鏡の処理をしてガラスで怪我をした私の手を治療してくれた。たいした怪我ではない、ちよつと手が切れてしまっただけだ。だけど、愛は怖かったと涙声で言った。前の私も鏡を割ったことがあってそのときはすごい血が流れていたと。前の私が何を考えて鏡を割ったのかわからないけど、初めて前の私に共感した。やっとなんか私だったと実感できたのだ。

「そついや、さつき柏原も綾瀬と同じ弁当だったな。なに、お前ら付き合ってたんの?」

「えつと、生徒には内緒にしてほしいんですけど、実は結婚しているんです、私たち」

離婚の危機だったことは内緒。拓真君と愛と離れ離れになることが今はもう考えられない。

「え、マジで!?まさか後輩に先越されるとは思わなかったわ。なんで長年の付き合いの先輩に言わないんだよ、水臭い奴だな。俺は婚約報告だってちゃんと伝えたのによお」

「こん、やくですか。それはおめでとうございます。結婚式は必ず呼んでくださいね！」

「おお、絶対来てくれよな！旦那も一緒に連れてこいよ」

おめでたいことなのになぜか心が痛んだ。もしかしたら私は、前の私は五十嵐先輩のことが好きだったのかもしれない。

でも、私は、私のことが嫌いなのに何だかんだで優しい拓真君のことが好き・・・だと思う。人を好きになるのは生まれて始めてだった。五十嵐先輩みたいになれたらって憧れていたけど、中学の時はまだ憧れでしかなかった。

だから、この気持ちが恋なのか愛なのかわからない。拓真君の言動に一喜一憂して胸がドキドキする。拓真君と愛と一緒にいられて幸せな気持ちを人はなんて呼ぶんだろう。

拓真君はまだ私のこと嫌いなのかな。

昔好きだった人を本当は今も好きなのかな。

気がつけば拓真君のことばかり考えている。憧れの五十嵐先輩を前にしても早く拓真君に会いたいと思う。

きっと私は旦那様に恋をしている。

### 15歳の先生3（後書き）

たくさんのお気に入り登録ありがとうございます。  
やっと恋愛要素が出てきました。R15は保険です。

## 主人公の設定を変更します。

本当に申し訳ありませんでした。

15歳なのに指導できる立場ではないことをあまり深く考えず済ませていました。

15歳の先生編を一度全部消します。また再度考えてきます。

今度の更新は12月頃にまた。

## 人物紹介

名前 年齢 誕生日の順です。

主人公：柏原葵 25歳 3月28日

旧姓は綾瀬葵。4月1日を境に15歳以降の記憶をなくす。

いきなり旦那と娘ができてあまり気にしない流されやすい性格。15歳までは普通の女の子だったが、18歳のとき茶髪でクルクルの厚化粧女になっていた。25歳の現在は黒髪ストレートに落ち着いて顔はきつめの美人で性格は悪そう。

旦那：柏原拓真 23歳 4月4日

娘を溺愛しているが、主人公をひどく嫌っている。

離婚しようと考えていたが、主人公が記憶を取り戻すまで離婚は保留。

眼鏡をかけた整った顔をしている。女の子から人気がある。他人には八方美人な態度を取るが、主人公にはとことんドライな性格。段々と妻と話すようになって・・・。

娘：柏原愛 4歳 2月14日

パパとママが大好きな可愛い女の子。

主人公が記憶をなくすまで家事と葵さん呼びを義務づけられていた。

簡単な料理が得意。

先輩：五十嵐颯斗 27歳 1月11日

主人公の憧れの人。青春時代の象徴。婚約者がいる。皆の中心にいて太陽のように明るいうーどメーカー。中学生のとき大人気な生徒会長だった。昔のまま変わっていない。

今後、違う形で出てきそうな人達

嫌みで嫌われ者の堀先生。

可愛いギャル系の水島さん。

イケメン優等生の相羽君。

高貴な教頭先生。

ということとで12月にまたよろしくお願いします。

主人公の設定を変更します。(後書き)

消そうとしましたが、運営の関係上掲載小説は残すようにと書かれていたので小説の置き換えを明日3作書きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6415y/>

---

未来トリップ

2011年11月24日01時35分発行